

第53回(平成27年度)北海道優良米生産出荷共励会最優秀賞受賞者現地報告

移植栽培部門 個人の部

第2部 最優秀賞

(うち6.0ha以上12.0ha以下)

受賞者氏名 安田 憲司
住所 勇払郡厚真町宇隆239番地の1
審査員 北海道農政部生産振興局技術普及課
主査(普及指導) 李家 真理

項目	年次	平成25年	平成26年	平成27年	3カ年の平均
水稻作付面積		6.5 ha (6.5)	6.7 ha (6.7)	6.3 ha (6.7)	6.5 ha (6.7)

注) 加工米、新規需要米、政府備蓄米を除く面積。()内はこれらを含む面積。

1 経営の概要

経営耕地面積 11.2ha

水稻作付面積 6.33ha

2 家族の就農状況

(平成24年12月14日現在)

本人・続柄	年	性別	平成25年	平成26年	平成27年
本人	63	男	○	○	○
妻	59	女	○	○	○

3 立地条件と稲作の経歴

(1) 地勢・立地条件

厚真町は胆振総合振興局管内の東部に位置する。東はむかわ町、西は苫小牧市・安平町、北は由仁町、南は太平洋に面した南北に長い町である。国道や鉄道は海岸線に沿って町の南端を横断している。

気候は太平洋側気候で、夏季の日照は少なく、冬季は積雪が少なく日照が多いのが特徴である。日本海側気候の岩見沢市と比較すると、最多月降水日数は12月の20.1日に対し7月の11.2日、最少月降水日数は6月の8.0日に対し2月の7.1日、年降雪深は753cmに対し138cmとおおよそ60km程度の距離だが大きな差がある。

耕地面積は約5,700haで、販売農家戸数は410戸である。耕種部門では稲作を中心に麦・大豆、ばれいしょ、てん菜、花き・野菜類が主な作物である。そのうち、稲作は胆振総合振興局管内の水稻の作付約3,500haのうち、1,600ha(44%)を占める管内最大の作付面積とな

っている。

農業生産額は約11,450百万円のうち農産部門7,320百万円、米は3,190百万円と全体の約28%を占める。また、特産品として有名な「ハスカップ」は日本一の作付面積となっている。

(2) 稲作の経歴

安田氏は昭和46年、18才の時に高校を卒業し就農した。就農時の面積は5haだったが、その後無理せず、購入や借地などで順調に規模拡大を続け、一部河川改修やほ場整備で減少したものの今日の規模に達している。

項目		年次	平成25年			平成26年			平成27年		
			N	P	K	N	P	K	N	P	K
基肥 (kg/10a)	全層		5.2	5.2	4.7	5.2	5.2	4.7	5.2	5.2	4.7
	表層		-	-	-	-	-	-	-	-	-
	側条		3.2	3.2	2.4	3.2	3.2	2.4	3.2	3.2	2.4
追肥	kg/10a		-	-	-	-	-	-	-	-	-
	期日		-	-	-	-	-	-	-	-	-

北海道における安田家の歴史は、曾祖父が明治28年に富山県砺波から苗穂村（現札幌市東区苗穂町）に入植し、その後、明治38年に現住所に転居し本人で4代目となる。

栽培作物は一貫して水稻を中心に転作では麦・大豆を、平成5年から平成25年までほうれんそうを導入し多角的な複合経営を展開してきた。

稲作に対する真摯な姿勢から、JAとまこまい広域米振興会の会長、日胆地区ゆめびりか生産販売プロジェクト会長をそれぞれ平成20年から勤め、地域の水稲生産者のリーダーとして活躍している。

4 稲作技術の特徴

(1) 有機物の施用と透排水性改善

水田は「ウクル川」に沿うように沖積土のほ場が3カ所にある。平成19年に基盤整備が終了するまでは乾きが悪いほ場もあり、産米の品質はバラつきが大きかった。基盤整備後は、ほ場の物理性が大幅に改善され、収量や品質も向上した。特に品質についてはタンパク質含有率が低下し、安定的に低タンパク米生産が可能となった。以来、透排水性を維持するために心土破碎を収穫後に毎年実施している。

心土破碎は毎年実施しているが、ほ場の条件が湿潤でホイトラクターで施工できない場合は、近所のクローラトラクターを所有している農業者に依頼し施工するなど、土壌の環境維持に細心の注意を払っている。

稲わらは全量秋すき込みを実施している。下層には火山性土が見られ、地力の維持・増進には秋すき込みがベストと判断の下、過去15年にわたり実施している。

(2) 施肥法、耕起、代かき

積雪の極めて少ない地域であり、融雪材は不要である。ケイ酸の補給は土壌診断結果に基づき増減させているが、ほぼ16mg/乾土100gあるためケイカルにて毎年60kg/10aを春に施用している。秋すき込みはロータリー耕にて実施しているが、心土破碎とセットで実施する

ことにより透排水性は維持されている。

施肥は初期生育の確保と低タンパク米生産を優先に、量と側条施肥割合を決めている。肥料はBB肥料を使用し、施肥コストを抑制している。

項目		年次	平成25年	平成26年	平成27年
堆厩肥施用量kg/10 a			－	－	－
稲わらの処理法	前年産	春鋤込	－	－	－
	当年産	搬出	－	－	－
		秋鋤込	100%	100%	100%
土壌改良材kg/10 a	資材名	ケイカル	ケイカル	ケイカル	
	施用量	60kg	60kg	60kg	
透排水性改善			心土破碎	心土破碎	心土破碎
(備考) 心土破碎とあわせて、毎年溝切りも実施 ケイカルの施用量は土壌診断結果に基づき耕起前に16mg/乾土100gあることを確認し決定している。					

(3) 作付品種

経営耕地面積は11.2ha、うち6.3haで水稻を作付けしている。品種はコンタミを防止するため2品種としている。「ななつぼし」が4.2ha、「ゆめぴりか」が2.1haである。

冷害常襲地帯として、常に冷害対策を念頭に営農している。とくに「ゆめぴりか」は深水管理が確実に実施できるほ場に作付けし、収量・品質の安定化を図っている。

項目		年次	平成25年	平成26年	平成27年
作付面積	品種名	ななつぼし	4.4ha	4.6ha	4.2ha
		ゆめぴりか	2.1ha	2.1ha	2.1ha
	合計		6.5ha	6.7ha	6.3ha

(4) 育苗と移植

育苗様式は中苗（型枠）で、は種後概ね30日で目標葉令に達し、確認の後、移植を開始している。初期生育の確保が難しい地域であり、ずんぐりした健苗育成、適期移植、老化苗対策を着実にやっている。は種は2回に分けて（2日の間隔をあけて）実施し、老化苗対策と適期移植を行っている。

育苗用土は山土を購入し、自家で培養している。pH・ECは、JAの土壌分析センターで分析を実施し、その結果に基づき調整している。これにより大幅な直接費削減につながっている。

項目		年次	平成25年	平成26年	平成27年
育苗形式名			型枠	型枠	型枠
移植時期			5/20～5/27	5/19～5/27	5/19～5/26
栽植密度	畦幅×株間		33cm×12cm	33cm×12cm	33cm×12cm
	m ² 当たり株数		25.2株/m ²	25.2株/m ²	25.2株/m ²

(5) 水管理

ほ場は、全筆用排水が分離されており、適正な水管理が行われている。畦畔は火山性土が多く脆いため、こまめな補修を実施している。土壌の還元（ワキ）対策では、通常は生育を促進するため水の入替えを行っている。とくに強い還元状態の場合には、幼形期前の中干しを行っている。幼形期以降は徐々に深水とし、危険期には20cmの水深を確保している。落水は8月15日以降としているが、決して潤沢な水環境ではないためムダな水を使わないことを念頭に、確実な水分補給で良好な登熟条件となるよう心がけている。

(6) 病虫害防除

防除の要否は自身のは場の観察や予察のほか、JAや普及センターからの情報を総合的に判断し、速度連動型自走式防除機を共同所有する農業者と協議し、薬剤の選定や防除時期などの確かな防除となるよう細心の注意をしている。

近年多発している紋枯病は予防的防除、大きな減収・品質低下の要因となるいもち病やカメムシは発生対応型防除に努め、対象病虫害によって適切な防除方法を選択している。除草剤や殺虫殺菌剤も雑草や病虫害の発生状況に合わせた最適なものを選択し、防除回数の低減を図っている。

(7) 乾燥調製作業、その他

収穫は適期刈取り判定を基本に、全量を半乾粉でカントリーエレベーターに搬入する。カントリーエレベーターには水分17%まで乾燥した籾を放冷後に搬入、そののち施設での2次乾燥を経て玄米にしている。これらにより、安田氏は適期収穫と収穫直後の心土破碎と秋すき込みを全ほ場で実施している。

また、機械の利用効率を最大限に高めるとともに減価償却費を圧縮するため、無理のない範囲で共同利用を行っている。機械類の整備を怠らず、可能なものは自身で整備するなど長寿命化を図っている。

5 良質米の生産に対する意識と1等米出荷実績

数年に一度は冷害に襲われる稲作地帯として収量・品質の向上・安定を目指し、たゆまぬ努力を重ねてきたことに加え、「ゆめぴりか」に代表される高級ブランド米の産地形成に向け、日胆地域を牽引するリーダーとして、生産者から厚い信頼を得ている。とくに安田氏は「自分の稲づくりは1等米は当たり前、絶対に倒伏させず、低タンパク米生産は基本」と言い、低タンパク米の生産割合がすべてを表している。

収量と品質の高位安定は基盤整備による効果は大きいですが、その環境をしっかりと維持し、さらには低温や日照不足など、冷害となりうる気象条件に敏感に対応した管理を行ってきたことが今日の結果につながっていることは言うまでもない。

北海道における胆振の米は、空知や上川の陰に隠れてしまいがちである。冷害の常襲地帯として収量や品質の変動の大きさから、厳しい評価があったものと推察される。しかし昨今、道内有数の良質米産地に変貌を遂げつつある。収量や品質の変動をいかに小さくするかが何より肝要と考えるが、安田氏の事例はそれを何よりも雄弁に語っている。

今後はこれらの取り組みが波及することに加え、特別栽培などを取り入れ「キラッとひかる産地」としてさらなる良質米産地としての評価向上に期待したい。

項目	年次	平成25年	平成26年	平成27年	3カ年の平均
総出荷数量 ①		498俵	595俵	537俵	543俵
一等米数量 ②		498俵	595俵	537俵	543俵
一等米比率②/①		100%	100%	100%	100%
	タンパク6.8%以下	349俵	595俵	537俵	494俵
	低タンパク米比率	70%	100%	100%	90%
	合計	419俵	695俵	637俵	584俵

(執筆者：胆振農業改良普及センター東胆振支所 地域係長 山本正浩)